

群書類從

卷

八



門 4 曾 4
775
巻 221

群書類従巻第三百廿四

檢校保巳一集



紀行部八

ちくし先尊

正徹

いしやうひのすゑきよ 神みわつと古葉をひらく
花鳥の力きん 詠さむへさかきく成ねきこさ
きよ水のつとねじよすうり ぼろくさあを
きすうひむく 園ねるさくまゆふひうかか
とよまのさあねすく人さけはくえさ家とさ
ひらきあともあさきとさあ乃衣あささあ
えんさのすさいあさささあさあさあさあ

ひさ乃若くやとてくちら川にわらふ
道のうしろく言ふ本きく杉村にわしく
鳥居おとそりまを田之と穢乃ねまへ
うねりおとせにけり早午乃坂とく
ちらちまてちりーうちやすみは

明乎不社とわきと勇たるおいらの森の下つ
いねまをこり心まや川おとたりちりー
るくもてわりー

口うらり花と鷹とほしとちりまや拂ふまは山
じまや川いも秋をとりと毎後りん知人とお
昔ぬる人おとせうしぬみの口いりま若くしと

おとちまてくちら川にわらふ
胡之若尹に和音は道の長者ありあつ
まは時うつりせくありぬりあやあのだす
んそわらひ肉は居あがり千首乃ういま
りんさくー信らまをりりー述懐の奇乃中に
いあんとあひまをてあひまをてあひまの
おとちまてくちら川にわらふ
近江乃小邸を掃磨は細川に和音不乃
五条乃京よりうらりちりーと道の
にまをうひて武家乃まじせ井を
つ家の風もよとわらふあつを

河津のけりありて其年乃冬彼細川氏と
正一はつらき後て中々山師ともいふなり
引くは西の端ありて開き一休に弟と志津ふ
湯志赤取也時乃管領右京地入通騎より知
約より人等懸答ありのありと此方彼方あり
ま一やと母守のころも是はありぬやうと西三夜
大納言ありてありてはくわ奇は通とあり
おこしはくみ一はくは明はは後乃元の夢は
先より君とていふは虚く一はくはひ一はくは
まよりか一はくは今はも守まみ又書くり人ゆ
み付ては懐齋は淡水くきよみとひゆふありすり

針と紙一ぬき都乃山もがれをておの

今いふや知よもからん人の都のふくもかきはく
番馬さる井おといふあり山ありてありなり
まあり水のありて細く常を中に入れそ
多る衣葉のころころと松乃高波岸の山師え
もいらぬ春と油一か不あり

宿禰の志よりにはは物教はあそやう人の松の波浪
今松山中にう油のぬ海生の末ありてありや
山風も松のうきくきありていふ山師一はくは
ありて

まありていふ山師一はくは

遠くくぬわくわくするに人をもよおす歩東よ
江川をわたりぬる禮お事細竹浪のひく朝日
字とらう人よ南よき真砂山雨くみ見わらう松
風象とやあらうよ乃月影とらぬあうお
月を物と野伏とんく一ひくさくまつき蓋
あきりぬおひらう流の池よ先くあらう鴉鴉鳴こ
くさくこくと柳くまると堤乃柳岸の板ひりく
あなりのく寝くくすのわさくさくひりうまらう
くらま流花みま流くまらくはし流竹りうく
家旅まらう海とさなる流山中の心飛くく百本
心すようくあらう流水たかまきくく岸もく

あく又くく流のすく下道を流れまきくやく
らありと麻垣のり習はれまはくいとふとく志
ら浪乃とく流竹くくくありとすくく流竹
のりありありとく入くいとく寛意ありと夜殿の
西にらうつとくさく方又一字ありと号作法補池
大士ありとすくあかりと床ありと今下久奈乃納
僧とくたけのたくと坐禪系字とくまらんとありと
は法ありとありとやとありと人とも家よありと
ゆきありとありと假寐ありとありとくありと
りく新きらく禪流とありとくく言れよ和
奇は抄抄瓜重ぬあんりとたか人ま床のう人に

那歌連所お付おくといふるに物さうり乃のいふ事半
一折ある一しゑの生るは川は鳥のいふひらけ
くかき幾つ先とていぬとて一保氏乃をさうある奇
古本あり一院所はく一増え次は京控抄改
白濁の信とていふるに物さやのいふとてゆふは花
らうみ世の八等思ふ人衆といぬ物さく一脂堂とて秀
あやまた言井のこの果の枝やもちこの病も祀ぬらす院
ぬきあり一
故法秀寺入道殿 部解由小路殿は名道將
けふふひといふとて一さのいぬ
といぬ句一

く川流路やあや一やせると中へとて

といぬ句やうんに

夕霧のう人に言井のう果のい

あはれ言をいぬとていぬとて一吸合のいひぬき寺
斗也は所いぬとていぬとて一入は物さうりは
今とていぬとていぬとていぬとていぬとて掃
あやとていぬとていぬとて定ある

且門の山橋を掃あけく花さあや一説と物さ
め此一首とていぬとていぬとていぬとていぬとて
説とていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとて

あふくしるるあふく

うらみはるまゝあふくしるるあふく
かきやあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

あふくしるるあふくしるるあふく
あふくしるるあふくしるるあふく

寺年興の年以新法のきめ人律ありゆりてゆりしよ
差のき何とくひや〜と物事の記〜とつ〜とを
ら那盧遮那のほ〜とらあり〜も又唐化利生のほ
り〜と長山浄土の生力〜と唐とてげし〜
此心とわ〜結言ゆうお〜又遮那の命とほ〜とらありよ
ら中川沖後とて教を〜とあり〜

家老りう紀とて〜と教ありや波の白ゆふ事ありけう也
山回〜出老のわ〜

雲とて何とて木言知〜と神とて〜と君のえ〜とらけり〜と
女日神事言の目也お〜とま〜とるゆり風とら〜と
う原の別斗とて〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
う〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
信と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
中神わ平治の川と〜と家と〜と〜と天の事と〜と
知らつ諸君と大宮に唐ありと〜と〜と〜と〜と〜と〜と
事と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
今秋石を芦原と五百秋瑞穂玉とほ〜と〜と〜と〜と〜と
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
く〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
衆と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

今朝又夫の心なき時よりよのよなるやんほひら
あふふ〜為ら難も方う〜ふまき〜神ク〜小
君もは美世かけ〜信申〜夫の系乃神のちり縄
回〜秋法系にらそら〜んひら〜よ〜る〜古首

春

この系乃たあき〜初らぶさよ神代のまの白ひと

夏

あふ〜る〜ん〜涼〜神風やまひ〜女枝の松乃村さら

秋

あふ〜ら〜た〜神終乃山の秋の月〜紙〜君照を〜ん

冬

平はのりかき〜よ〜ん〜朝暮あ〜の〜う〜ぬ〜ら〜は〜ぶ

春

この〜や〜は〜ま〜ら〜ん〜後〜は〜あ〜ふ〜神〜後〜の〜ぬ〜と〜ま〜ん

雑

きの〜む〜そ〜内〜外〜の〜あ〜の〜ゆ〜た〜か〜い〜も〜い〜く〜は〜ま〜は〜世〜な〜の〜世
あ〜ふ〜は〜と〜老〜く〜山〜田〜は〜神〜ま〜ら〜す

あ〜ふ〜神〜川〜あ〜は〜流〜けり〜家〜あ〜ら〜い〜の〜と〜ふ〜と〜か〜ら〜ぬ〜を〜て
宮〜川〜流〜を〜ゆ〜ら〜た〜ぬ〜方〜は〜心〜を〜ら〜よ〜い〜と〜神〜い〜ひ〜たり
己〜切〜れ〜ぬ〜や〜跡〜る〜女〜日〜は〜月〜う〜け〜と〜水〜の〜ま〜や〜川〜の〜春〜の〜曙
ら〜ん〜門〜の〜栞〜も〜あ〜〜く

旅〜人〜乃〜き〜え〜ん〜あ〜ら〜わ〜さ〜り〜武〜者〜の〜水〜乃〜と〜川〜の〜と〜い

ふいのまりな

けはの月る宵の森のくみね
うらぐらぐらとわらわら
伊予にすてくさくさ
しせう海つあめのすか
あはれいづこに

あはれいづこに酒の沖は
あはれいづこに酒の沖は

あはれいづこに酒の沖は
あはれいづこに酒の沖は

あはれいづこに酒の沖は
あはれいづこに酒の沖は

中将家方ふあされゆり

五月

五のりはかも成ぬゆ

待意

そらおふ怪とるひさたの

旅り

お宿のたふよ世の旅あ

女二百五くはられね

とちく〜

多岐の山に民のまはるるまはるる年々かへりてのくさ
野火造のあふりに此の牛のあつていふ

此の牛のあつていふは
くさやいふ新あり

日せぬとたふらへりていふは
関川とやを

若くは流とて一た関川の子は流のあつて
此の町やいふは

去流の地との町屋のあつていふは
改の下とていふは
去乃真流のいふは

呼ぶは改乃とていふは
是とて又流とていふは
考とて言はれりていふは
山中のあつていふは

若くは改乃とていふは
此の流のあつていふは
あり

此の流のあつていふは
去流のあつていふは

去流のあつていふは
あり

まはれう守ちう田せむ入く水のまはれはまかふ
女ら百かーい本乃里と申すはらるる

今あらに常事此神と有るらんまの縁の柏木の里
うへ田川原とて

今ま月あつはあもうへ田川を流り水の水海と
うなやまこらや

神代より若孫うーいふか
まらね

大伴の濱もゆゆゆぬ大智若昔を記とひうれ
中興の祖もく百の石を執らせむひーいふか
いふうて

ゆふたなる大伴のりやうまうていふあひのまはれ者あはれ

そまうい水海のまうねくすりのまはれ
らうとまらる浪のうかとも子代とあそぶるま
あまはれ

世系をあらあうのうーいふか
沖原中一りともあうのうーいふか
あうぬまともえらめと神代ともあうをわ
ゆーける事あうーいふか

孝考

お君のふ乃佐は思をうり大伴日枝神光の

十月十日今度沖及中報をの初款勅巻を全覽
之由は作下仍池筆聖旨令持系者也
右著廣院取沖系宮之耐記云々

右伊弉記行平山等山藏本書寫校合了

十時

天保四癸巳年庚六月十五日於碓用郷柏川邑山上書寫之

中村萬喜直衛

群書類從卷第百廿四

群書類從卷第百廿五

檢校保己一集

紀行部九

富士紀行

贈大納言雅世卿

永享第百九年長月十日公方様富士山流石を小東
山へ下向あり可供奉之有無日より被作下今曉尚も
立物りしに相成所聞とて尋ねし事

思ひきの心も終にたてまきし事ありあふきの記
今曉よりある事とて尋ねし事ありあふきの記

秋乃雨のありき事ありあふきの記
昔津やう前あふ

松もなほむらりては川原ももさつはなすのまの結を
即ち川よりく

紙のうらみかきあはれもさつはなすのまの結を
守よめりては川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
かゝるや戸原もも

老の故もやうかたあみ山今けうあつたももさつはなすのまの結を
十日のちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を
あつたのちの川原ももさつはなすのまの結を

こぞおのり今宵は愛乃はみさるゝぬ付と散らさるる月
老而得月

こぞは流るる水の流るるに似たりとて思ふはなれ
霽月巻恋

即ちゆふの流るるもよふもよとて思ふはなれ
十四日あけの流るる水の流るるに似たりとて思ふはなれ
トわらふもよふもよとて思ふはなれ

衣乃里とて思ふはなれとて思ふはなれ
衣乃里とて思ふはなれとて思ふはなれ

山平とて思ふはなれとて思ふはなれ
山平とて思ふはなれとて思ふはなれ

ま

花乃乃山とて思ふはなれとて思ふはなれ
花乃乃山とて思ふはなれとて思ふはなれ

川馬野とて思ふはなれとて思ふはなれ
川馬野とて思ふはなれとて思ふはなれ

情言とて思ふはなれとて思ふはなれ
情言とて思ふはなれとて思ふはなれ

神意とて思ふはなれとて思ふはなれ
神意とて思ふはなれとて思ふはなれ

因とて思ふはなれとて思ふはなれ
因とて思ふはなれとて思ふはなれ

さうして西の沖路はくら流のりまのこまきし
其岸の道はあつた世はつらうも紅葉はあつた
高野の山もいふまじりよまやとみこて

富士は神のたつたのこまきし山はつた紅葉のりま
十右衛門は國垣見坂の沖路と下まじり
あつた坂のりまはつたのりまはつたのりま
又とつたのりまはつたのりまはつたのりま
富士とつたのりまはつたのりまはつたのりま
十右衛門はつたのりまはつたのりまはつたのりま
なつたのりまはつたのりまはつたのりま

あつたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま

つたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま

つたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま
つたのりまはつたのりまはつたのりま

天保四年六月十七日破用杓川奥蓋打山写々

天保四年六月十七日破用杓川奥蓋打山写々

中村直道

覽留古記

充孝法印

七は通風かさ雨のこし乃鴉をみ物ありてと色の
関与戸々一とますれ物まハ縁忠捨さくゆらるゝと毛
おく万乃氏く物とぬの物ありさ一紙を乗もと
うしけまを伊法くよ脚と孝と物も心と宗をのゝ
おゆふかゆ代りし物ゆをる家よ留土ゆ燈のゆと物
を紙と紙とまはゆと永享四年のゆ一長月十日は種
ねれゆ一とまはゆの折一と種は雨日未ありは
まこくは種もみえゆゆゆゆ一ゆ立の曉よりゆ川
一ゆ宮はゆゆ一まはみゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

世にありまけり袖の露霜もみこし秋のなほくゆせ
すのこき婦とてうすしとをあらぬ人のこころ
いふもあはれつゝ誰かたはくわらひとてわらひ
見せぬ

心せよけり露のまら入もうすすわらひのこころを
不被の雨あはれゆりこも経るこもあはれきたのこころを
若れもゆりてすしこころあり

たふとてはなせなれとわらひのこころあはれつゝ
をけしけりあはれつゝ

けりけりあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ
けりけりあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ
けりけりあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

うらみねの秋
十六日秋とあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

まらぬとあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ
まらぬとあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

赤坂の者あり
あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

道よりあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ
あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

いづれもあはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ
あはれつゝあはれつゝあはれつゝあはれつゝ

のうらみくく楳の葉をくくくくくくくくくくくく

秋をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
く井筒門まじりくくく

カサと云ふ方きくくくくくくくくくくくくくくくく
望遠かきぬくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
なななななななななななななななななななななな

なななななななななななななななななななななな
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

尾津國派くくくく

わの神の約をうけとておのゝ言のまはすこと
ふすまの流の舟一舟をこもむとてし

月影のまはるるをこもむとてし

やまのたのむあり^{たのむ} 二条相公羽林のまはるる

多の飛鳥井井門のまはるる

名所望月と

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

名所望月

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

名所望月

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

寄月祝言

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

つとめてておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

宇治川をまはるる

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

あつたての病を初とておのゝ言のまはすこと

秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り
秋の夕暮り

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

この御紙

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

すけのしるし

河津のしるしや日影乃とてまじりてのしるし
廿七有く河津川とす所とて滝其のあらたなり

立りてとて後とてなりて馬鹿川とてなりて
宇久福すとの所とす所めて霧旅乃とて
河津のしるしや日影乃とてまじりてのしるし

里はるすきなりとて
さくら井乃水とてしるし
一侍

かきとてしるし
くもとてしるし

百善の花のしるし
野山乃とてしるし

かきとてしるし
かきとてしるし

かきとてしるし
かきとてしるし

かきとてしるし
かきとてしるし

御所とてしるし

分三原の事為よりも何れもいへる事那乃中を好むと云

千時

天保四年己酉十月八日於備前洞嶽荒内山中寫之

中村直道

富士御覽日記

永享四年九月富士御覽乃沙下向月初十日京都
出御同十七日駿河國藤枝鬼巖寺沙下大雨すこ
時雨く曉より明て月を照るの事いふに沙下同十八日
府中先小野純子ありて沙樂をくら終りて
あはれおとるえあひ沖流をいさる夜枝ありし中
何れもかくはるへく山岩河を釣はるよりけりあへ
御着府中より富士御覽乃亭へすべしあつて
ふと伊予小思ふるふと終りぬわしと終りて

山道

後尾徳乾政

君の事々々の事々々やむありの事々々々々三行ら書

十九日ありし沙線

朝日さすなりありしりさぬありし朝日さすなり

いへー 乾政

く積を井乃まよとていひしりさぬありし朝日さすなり

又沙線

月雪はしるさぬをさぬかへしりさぬありし朝日さすなり

沙線ー 乾政

月雪さぬかへしりさぬありし朝日さすなり

同女日沙線

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

沙線ー 乾政

吹さぬかへしりさぬありし朝日さすなり

實雅之末後

秋さぬかへしりさぬありし朝日さすなり

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

姻真店士 山名金吾

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

雅世朝臣 飛鳥井後

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

あはれさすなりしりさぬありし朝日さすなり

四正

乾政

おぼろのたのむ沖波のわびさうまきおのぬううまねる

照貴のうへ沖録

我があつらうたうたおのりお部乃たうまあまうまうま
とたのまてみまやまをりけたおれやうのうまおまう

四正

照貴

今もやんせははるあやうまぬふらうまうまうま
うまうまうまうまうまうまうまうまうまうま

運御をの塩見坂あま沖録

海うらや沖心おのりまうまうまうまうま
あまあまあまあまあまあまあまあまあま

沖うま

乾政

わとまうまお山うらうま雲のうらまをなうま
はる坂あま沖録

あまあまあまあまあまあまあまあま

沖録

秋まあまお山うらうま雲のうらまをなうま

沖うま

乾政

富士乃根お山うらうま雲のうらまをなうま

乾政

雲うまお山うらうま雲のうらまをなうま
不しお山うらうま雲のうらまをなうま

あつたやうにふるいさうし多分只昔乃とて
くりしき山とらうとて自然の忠告とともあつ
りすへる毒細女山知んぬ山とらうとて思ふ
何事をも又たさうみやうとて大なる事と
志をくし望よりいさげしとて亦依衣外格
なる衣ともた次第とてさうとて山とて野宴
とて細川下野も同為り山とて中務とて補
りともいさうとていさうとていさうとて
いさうとていさうとていさうとていさう
とていさうとていさうとていさうとて
いさうとていさうとていさうとていさう
とていさうとていさうとていさうとて

いさうとていさうとていさうとていさうとて

八旬有餘宗長

此一冊は、（シニ）兼味園神の心（サト）松川より其の
ら宛として、（天）年々月の中のみりきりし妙
より神の空つゝとあやうらうらうと
音こゝろとあやうらうらうの方と見こゝろ
きく射るゝとあやうらうのよきと見こゝろ
そのまゝとあやうらうのよきと見こゝろ

中村直衛

富士歴覽記

入道中納言雅康

明應八年五月三日富士歴覽の巻を先んずりて
立竹のまゝ江別柏木といふゆりて四日朝
ち侍ある社頭とありとてたゞまゝのまゝ

内白川外白川きののよりぬゝ水とて入くわたり
わすれとて心ゆくありた折念ゆき

山平とて所せりやうとてさうとて
ふいふとてやうとてやうとて

因民部大輔威負立所つゝとて先んずりて
きりきりゆりゆり

今更なればなればまじし程初めうらむとて侍つく

初めと思ふたしりやま新しあやめは松印うらむと

七日雨ふるまき区る一ゆり一に民部大輔のもこり

よきとていゆき

みわこ人さきを公うらむ森は里に宿るありあ

区

五月留は空のけきあやうきまじかきまのこまき

小日宿所小肉うらむ哥まり浪行しゆり一に木をそは

題紙まくりて初春

道とて一世人のまきとておのこまきうらむまはまき

柳風

これやいもくはむむ風は羽つゆはむむむむむむ

秋田

まきりし神やまははら田はうらむむむむむむむ

達磨

橋のこけうらむまきあはむむむむむむむむむむ

松

あやめ思ふあはらむ松をむむむむむむむむむむ

けきあやめあはらむむむむむむむむむむむむむむ

りてあきあり一浪の中

郭公

あやめ思ふあはらむむむむむむむむむむむむむむ

納涼

涼風吹く若井は涼りきよは世とあふひのこころをなほ

恨意

いはれまふとあはれあふと恨めしき心持のあはれと
十哲太神宗代官の人とあはれとせりこころをなほ
ゆつりきよ

中津川あはれくはらもはら海へかへりてはなほ
十七日尾羽大野のあはれゆりこ伊豆若早雲菴（たて）もあはれ
肩書るをなほあはれ一見り次り後及今川宿羽はなほ
よもつとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
年小庭門をなほあはれとあはれとあはれとあはれと

物まももこのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
乃席にまみてつりきよ

今昔あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
十哲了了は那緒川水野あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

旅

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

祝

